

再び「社会改革の進む中で」

大槻 優子

T様

ブラハは、春の盛りです。果樹の花が、音楽祭が
というのはやめましょう。今、まさにすべてが「ブ
ラハの春」です。

社会全体が、大きく速く変化し続けています。そ
の中にいると、「歴史を生きる」実感がわきます。
日々の暮らし、人の行動の一つ一つが、歴史をつ
くっていく証を見ます。文化というものは、「○○
様式」として類型化され、整理されたものではな
く、人々の具体的な歩みそのものだとわかります。

その意味で、今、チェコスロヴァキアに住んで、貴
重な体験を重ねているといえます。

先日、知人が旅の途中でブラハに立ち寄りまし
た。数年前、ブラハに三年間住んで、チェコ語を学
び、チェコの人達と交友を暖めた経験をもつ、親
チェコ家ともいえる人です。ホテルから電話をかけ
てきて、「チェコスロヴァキアの社会の変わり様
を、ブラハの変わり様をこの目で見たい。」と、相
変わらぬのはりきった声でした。ともかく一人で歩
きまわりたいという希望で、その後会う約束をしま

した。ヴァーツラフ像の前でということ。プラハ市の中心街、ヴァーツラフ広場に象徴的に立っている、馬に乗った「建国の父、ヴァーツラフ王」の像です。私は、そこでの待ち合わせは初めてで、電話を切った後、ふと「渋谷、ハチ公の前で」という言葉と重ね、一人で笑ってしまいました。

翌日、二時を少しまわった頃、汗をかきかき、知人が走って来ました。一人で過ごした時間を充実させた様子がうかがえました。あたかも、買い物途中の偶然の出会いのような挨拶になりました。夕方からの予定までの時間を計算して、「ヴィシェフラドに行きましようか。」と試みてみました。中心街から地下鉄で二駅、十一世紀の城跡、そこを巡らせてある城壁は、現在は静かな散歩道です。朝から歩き通していたにもかかわらず、「ああ、なつかしい。行きましょ。」と、すぐ応じるところがすてきです。電車を待ちながら言うのには、私の足はいつも町から遠ざかり、町の中を歩く時は、顔つきも変

わって目的地めがけて直進するのだそうです。言われてみればなるほどと思えます。それで、プラハ案内を私に希望される折にはどうなるか予想がつかないというものです。勿論、町見物を目的にする場合は、そう努力しますので、どうぞご安心ください。

地下鉄の駅を出て、徒歩五分、私達は古い城門をくぐり、ロマネスクの円筒形の祈禱堂を右に見て、城壁の上に立ちました。「おお、私のプラハ。」と、眼下を流れるヴルタヴァ川の上流に目を向け、知人は感動の声をあげました。「やっぱり、プラハはきれいだわ。私の住む町も本当にきれいだけど、プラハもきれいだわ。」移り変わりの速い東京で生まれ育った私には、ずしんとくる言葉でした。ゴシック様式の教会の向こうの彼方にプラハ城を見ながら、ゆっくり歩き始めました。午前中の一人歩きの感想が飛び出しました。「プラハは、何も変わっていない。目にみえては、何も変わっていない。こんなに大きな社会変化なのに、みんな落ち着いて暮らしてい

る。」

本場にそうです。人々の日常の暮らしは、相変わらずに見えます。あの大集会が繰り返され、全国ストライキが行われた時でさえ、日々の暮らしは落ちていきました。新しい内閣の人選が進んでいる横で、各家庭の母親はクリスマスのお菓子を焼き、プレゼントの買い物をし、ルーミアへの援助物資の荷造りをしていました。高校受験を控えた八年生の生徒達は、様々に変わる入試情報の中で平常の授業を受け、説明会も開かれなまま、一枚にしぼられた志望校に願書を出しました。各校長裁量による入試方法が決定したのは、三月半ば、受験日一か月前のことです。生徒自身も、両親も、気持ちの上では落ち着かなかったはずですが、その不安が一つに集まって行動に表れるということにはなりません。職場でも同様なのだと思います。様々な揺れ動く感情を克服しての行動面での落ち着きなのです。知人が「すごい人達だ。」と繰り返す度

に、私も相づちをうちながら、千年も昔にこの城を支えたチェコの人々の暮らしに思いを馳せたことでした。
(四月七日記)

今、国のレベルで法律が大きく変わっています。これが実際の市民生活で機能するまでには、或る一定の時間を必要とするでしょう。また、それがよりよく機能して、人々の生活に役立つようになるまでには、更に多くの時間がかかるでしょう。それまで人々はじっとして待つわけではありません。いろいろな試みをします。統制から解放されて、「禁止されないことは、すべて自由」とばかりに、個人的な商取り引きが路上で行われますし、奇抜な政党結成への署名運動が人を集めています。また、議会議決事項に反対する、一見軽はずみと思えるような意思表示に人々が連なり動いています。自分でしたいこと、できることをまずはするといった段階なのでしょう。方向性の定まらないエネルギーが渦巻いて

いるようです。

多種多様な新聞雑誌が、飛ぶように売れています。読みたい、いろいろな事実を知りたいというわけです。情報源が豊富になり、情報世界が広がりました。その横で、こんなつぶやきが聞こえます。「新聞代がかさんで、家計にひびく……。」それにもかかわらず、情報取捨選択学習のための投資は、まだ伸びそうです。チェコ語だけではなく、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語の新聞雑誌がそのまま日常生活に入ってくるようになりましたから。残念ながら、日本語の新聞は販売されていません。

政治面で大活躍した学生達へ向けてのつぶやきも聞こえます。「あの緊張感に満ちた勤勉さが欠けてしまった。」組織改革を推進させたエネルギーが、専門領域の学術面で発揮されるまでも、時間が必要なのかもしれません。先日、大学哲学部に立ち寄りましたら、「準備はされた。あとは各自の努力にかかると。」という内容のビラが貼ってありました。

学生達の改革委員会からのものです。学生達の勉強の場の広がりが、勉強の仕方そのものを変えていることも確かです。大学の外で、或いは外国の大学で勉強できる可能性が広がったようです。知り合いの女子学生も、プラハの大学で沢山学ぶのでなく、アメリカの大学でも学べる道を開拓しました。

市民生活における自由、自主、自発の現れを様々な形で見る昨今です。これらが、単なる混乱状態を意味するのか、社会発展への準備段階として位置づけられるのかは、社会改革開始期からの目標であった「自由選挙」にかかっているように思われます。

(五月二十日記)

自由選挙の投票が終了した日の午後、感動的な野外コンサートが催されました。四十数年ぶりに帰国した指揮者クベリック氏の発案で計画され、実現の運びとなったようです。

相互理解の演奏会

演奏曲目、B・スメタナ「我が祖国」

出演、チェコフィル、モラヴィアフィル、

スロヴァキアフィル

指揮、ラファエル・クベリック

場所、ブラハ市旧市内広場

私達家族は、これだけのことを知って、昼食を終えるのでかけました。広場の中で聴きたかったからです。見たい、座りたいとまでは考えませんでした。

火薬塔の門から続くツェントナー通りは、旧市内広場を経てブラハ城へ向かう「戴冠式の道」の始まりでもあります。こぢんまりとした古い店の並ぶ通りをゆっくり歩いていると、大きな拍手が聞こえ、私達は広場に駆け込みました。演奏会開始予定の二時間以上も前だというのに、人が大勢集まっています。

十四世紀に建てられたティン教会の前に、白い野外ステージが設置され、椅子や譜面が並べてありま

す。大きな拍手は、楽器を抱えて舞台に登場して来るオーケストラ団員達に向けられたものでした。指揮者クベリック氏が、舞台中央でいろいろ指示をしています。全員が席に着くと、演奏開始の合図が出ました。「間に合って良かった。」胸をなでおろしていると、コンサートマスターが立ち上がって言いしました。「リハーサルです。」

二百人近くはいるかと思える程の大オーケストラが、一つの音楽を作っていく過程を目の前にして、改めて「相互理解」の演奏会の重みを考えさせられました。新聞などでご存知と思いますが、新しい社会体制で出発してすぐ、モラヴィアが独立共和国を求めて動き出しましたし、スロヴァキアの一国独立志向は、最近ますます強まっています。総人口千五百万人の相互理解の課題は大きいのです。それぞれの中心都市ブラハ、ブルノ、ブラチスラヴァを代表するオーケストラの合同演奏が実現したというのは、その規模の大きさではないところに意義があり

ます。

リハーサルは、途中から降り出した雨の為に中止されました。人々は持参した雨具を取り出し、その場を動く気配もありません。各自の傘を広げる空間もなく、お互いに融通しあって、小さな交流の場があちこちにできました。選挙結果の予想、クベリーク氏のこと、市民フォーラム支持、社会改革への期待、それに伴う困難な課題など話題は豊富です。本当に短く感じられる二時間でした。

雨も上がって青空が見え始め、良い雰囲気の中で演奏会となりました。身動きもできずに立ったまま



で聴いた「我が祖国」を誰も忘れないでしょう。社会改革で問われている文化的、政治的、人間的なあらゆる要素が、この演奏会に凝縮され、結晶化されたように思えました。

選挙は、新しい社会体制を支持する人々の勝利で終わりました。新たな出発です。

折りにふれて書き足しました。

プラハは、もう夏を迎えようというのに、雨の多い、風の冷たい日が続いています。

(一九九〇年六月十六日記)